

地域教育とまちづくり インタビューダイアログ

12月10日9:00~



若松：フロア担当の紹介。安倍さん、昨日の感想を聞いてください。

学生：多くの世代の方々とお話できてよかった。

会場A：いろんな方々と話げできた。学生が頑張っている。未来は明るいと思った。

会場B：勉強になった。学生の意識の高さが良かった。

若松：ネクタイを締めている人、していない人がいるが、ネクタイを締めている人は真面目そうに見える。登壇者の方々も、学校の先生の遠藤先生や益田市の社会教育課長の太畑さんは、お二人ともノーネクタイ。このような格好でいいかどうかは別として時代はこのように変わってきている。

90分の限られた時間の中で、発言は一応3分を目安として進める。テーマは、ふるさと地域、大会資料1ページに私の思いは書かせていただいた。目的は、

- ① 子どもたちに社会性をもたせる
- ② 地域の世代交流
- ③ 地域をフィールドとして地域人としての主体性をもつ
- ④ 教育環境を整え
- ⑤ ふるさと運動、教育活動をする事だと思っている。

子どもの取り巻く環境は変わってきた。人口減少、超高齢化、少子化、情報化、国際化、凶悪犯罪、不安環境の世界となった。そう言ったことを踏まえて、お互い違った立場で話していただく。

新谷：奈良市立富雄中学校区で総合コーディネーターをしている。それぞれの校区にコーディネーターがいる。私は主に中学校で活動をしている。学校側から見た地域の様子を話したい。富雄小学校で10年前に誘拐、殺害事件があった。その折、地域が丸となって子どもを守るためには、どのような立場がいいかという議論をした。その時の話から進めたい。

中村：西予市経済振興課にいる。大洲の南側に位置する。人口3,700人ほど。それまでの5年間は社会教育に携わっていた。公民館では、地域の伝承文化等、どの地区もも

のすごい数の団体が立ち上がって、自分たちの地区を考えている。しかし、活動をしているところだけが頑張っているのでは、地域が生き残ることができない。この会で、何でも聞いて、分からない所は聞き、地域で生かしていきたいと思う。

遠藤：37年間小学校の教員をしてきた。来年春には退職する。大事にしたのは、地域とともにある学校というスタンス。学生時代に地域の課題について勉強した。どうすればいいか、地域の人のづくり。教員になってからも貴いている。転勤した山の学校、町の学校、地域には素晴らしい人がたくさんいるがどうつなげるか。地域の力を子どもたちに向けてもらうためにはどうしたらいいか。愛媛県教育研究協議会の会長も兼任しているが、ここともつなげて、地域教育を本格的にしようと思っている。

大畑：小学校の教員8年、中学校10年、あとは社会教育行政に携わっている。行政としてしゃべりたい。益田市はいいところなのに、子どもたちは帰ってこない。益田に高校卒業まで過ごしているのに、なぜ帰ってこないか。新採で受け持った子どもがいた。帰ってきたが、仕事がないという。本当に仕事がないのか。タネをまきたい。

若松：特徴ある活動について話してほしい。その後の成果についても。

大畑：子どもたちが益田市のことを知らない。人は人の中で対話をしながら人を知る。または、生き様を知りながら。小学校・中学校で語り場をした。最初は大学生が高校生に話をする。それが小学校・中学校でも始まった。中学校での語り場では、益田が好きだという子がたった2時間で増えた。対話をするだけで実感したのだろう。いかに子どもたちが「人」に出会っていないか。

職場体験では、企業の社長に求人を出してもらった。中学生へ研修をしてもらう。ある中学校では、社長の言った言葉を冊子にしたいという声も上がった。いろんな世代をつないでしっかり対話する。そうすると、子どもはしっかり学ぶ。

高校3年生に小学校6年生が不安なことを話す。2時間で、ロールモデルになりえる。小学生はありがとうというメッセージを高校生に送る。異世代とかかわることでもみんな元気になる。子どもたちがしっかり変わっていく。

若松：大人が高校生に伝え、高校生が小中学生へ伝える。

新谷：富雄中学校では、「富より団子」を作り販売するなど、商品開発をしている。コーディネーターと有志で、学校の中でどう検証していくかということが問題になった。学校の方から、ボランティア部をつくるから、学校と地域を結ぶコーディネーターになってくれないかと顧問から打診があり、喜んで引き受けることにした。まずは、「富より団子」をいかに活用していくか。アイデアを実現化していく活動である。地域のおばちゃんと一緒にやってくれるからと生徒を口説いた。このボランティア部は、他の部と兼部してもいいということをしている。心に悩みを持っている子、人とうまくかかわれない子、そのような生徒が集まってくることもある。落ち着ける場の一つになっているのではないかと考えている。黄緑色のシャツを着て地域に出て活動している。子どもが担っているところが大きい。

若松：成果と地域の人はどう思っているか。

新谷：素直でシャイな中学生。地域の方のまじわりが難しい。年配の人は、今どきの中学生は怖いという。苦情の電話をいただきくこともある。地域の方は中学生のことを知らないからではないかと思う。ボランティア部のおかげで少し変わった。子どもたちと話をすることによって、素直だと思ってくれたようだ。外に出たときには挨拶をする、そのことが100倍の効果となった。学校の方に依頼することも、ハードルが高いと思っていたが、ボランティア部のおかげで話しやすくなった。地域と中学校の垣根が低くなった。中学生は、地域のお手伝いに参加するようになり、地域の方が褒めてくれることで成長した。

若松：子どもの一番人気の活動は何か

新谷：引退式。トイレ掃除に学ぶ。担当の便器を磨きまくる。地域のボランティアと一緒に担当の便器を磨きまくる。それを経験して3年生が引退する。

中村：担当便器磨き、素晴らしいと思う。西予市では、壮年会を立ち上げた。40歳くらいの方が公民館に来てコーヒーを飲んでいて、「青年がなにかやりよる。わしらもなにかやりたい」と言う。公民館だよりで、「我が地区へ恩返ししませんか」と呼び掛けたが、集まらない。次に、壮年会と地区の手伝いに声掛けして、粗大ごみを回収しましょうと、お年寄りの所まで取りに行った。また、イベントの時に壮年会に入りませんかと持ち掛けた。ほとんどの人が入ってくれた。高齢者の人は「ありがとう」と感謝されると嬉しい。そのあとは、ワイワイとお酒を飲む。それがよかった。以後、草刈りをしていただいたり、産業文化祭では、生きている鳥をさばいて焼き鳥にしてくれたりした。

若松：子どもたちとのつながりは。

中村：壮年会の公民館での活動の一つに通学合宿などがある。地区がうまく回る。

若松：活動の中で地域全体としてどのように子どもを育むかが問題。学校ではどうか。

遠藤：最初に校長になった時の話。30人ほどの山間の学校。運動会等、100人も来ていない。地域の温度差があった。学校の統廃合ということもある。そこで、学校地域支援本部の活用をした。地域の人材をリストアップすると300人集まった。保護者、おじいちゃん、おばあちゃん、地域の人、運動会で交流する。学校で子どもの学びと、地域の大きな交流の場となった。学校が核になると全然違う。

次の学校では、すでに、学社融合をしていた。学校の中でいろいろなことをする。10年続いたので、ずっと続いていけばいいと思っている。しっかりできている。壮年会には、学校のメンテナンスもしてもらっていた。

現在は、町中の学校。一緒になにかやるのは、これからかなあと考えている。学習の中に、地域の人にどんどん入ってもらおうと画策している。

若松：長い経験の中での問題点は。

遠藤：思いがあっても、自分の意志で継続するのが難しい。地域の人に学校というものは
どういうものか知ってほしい。流れが変わればいいものになる。

若松：継続が難しい。

大畑：学校は地域の中にある。地域の中に学校があるのだから、地域が主体になるべきで
ある。できないのは、地域側の問題。本気になって活動するかがカギだと思う。

若松：「このようなことを日頃思っている」というキーワードで議論してほしい

遠藤：ふるさと学習。学校は教育課程で進んでいる。学習の中でいかに地域学習を取り込
んでいくかが問題。学校で取り組むことができれば、続いていくのではないか。総
合学習の中で、子どもたち自身が動いて五感を通して学ぶ、生きる力を設定してい
る。学校と地域での学び、教育課程の中に、しっかり取り入れていくのが大事。

若松：子どもはバーチャルな世界と現実のギャップがある。子どもがいきいきと輝いたの
はどのようなときか。

遠藤：米作りをしている。苗床から作り、世話をして 1 年間の設定である。収穫時には家
庭科の実習も兼ねて、公民館の方に教えていただき、ご飯を食べる。しんどいを克
服して喜びに変える。いいとこどりをしない。

若松：命の連鎖、植物の連鎖と人間の連鎖を掛け合わせるといい。

大畑：消滅可能都市でなんとか人口を維持している本市においては、地方創生と未来の担
い手が大きな希望。益田市で生きるといふ種まきをしなくてはいけない。しっかりと
伝えていく必要がある。学校改革と社会教育。会話のプログラム、職場プログラ
ム、しっかり地域が作って、学校の教育課程に組み込む。学校だけではできない地
域改革。具体的な活動をしっかりつくる。継続のカギは地域である。学校の改革を
するのは学校の外。心に灯がともるような活動を進めていきたい。子どもたちが地
域課題を解決する、「こうあるべきだ」と子どもたちが言ったら、地域のうるさいお
じいちゃんがそうだなと思う。子どもたちが、主役、担い手、地域住民としてなに
をするか考え、行動に移すと変わる。

若松：子どもたちがいきいき活動すると学校も地域も変わる。

新谷：地域から見える子どもの姿。学校へ地域から「音がうるさい」とか「ボールで遊ぶ
な」とか、苦情が多い。学校は殻を厚くしている。努力するのは学校だけだろうか。
この地域に幼稚園をつくるという話があったが、住民が反対運動をした。

子どもの声が響き渡る活気のある地域。そうではないと思っている地域の人。そ
れが現実である。原因は、問題があったときに殻をかぶってしまった学校だった。
一緒に中学生と活動して、この子はいい子だと地域の人が思うと同時に、学校も地
域も変わっていく。広い中学校区のため、見る感覚が違う。年代層の差が激しい。
子どもとはかかわらない地域に住む人も多い。解決策は、学校に変わってもらうた
めには、地域が変わらなくてはいけない。そのためには、子どもが地域に出て交流
することが必要だと思う。富雄中学校ではそれをボランティア部が担ってくれてい

る。

若松：子育ては、地域の人は無縁だと思っている人が多い。

中村：地域課題をどう洗い出して、解決していくのか。「まちづくり＝地域課題解決」だと思う。どうやって把握していくか。ただ集まって話すだけではいけない。集まらない人の意見もある。どんな人を育てたいか。住みたい地区、場所、地域の方から子どもにかかわってほしい。

若松：公民館主事をしているときにどうだったか。

中村：学校へ自分から行った。意見が集まるのを待っていても集まらない。どう育成していくか、その段階で地域の声が集まっていくか。自らがやっていくことで変わる。地域の人からは、おまえが来てから忙しくなったと言われた。しかし、転勤して、2,3年経つといつ戻るのかと言ってくれた。

若松：会場の方はどう思うか。

会場C：宮崎県から来た。企業の立場である。私の地域も同じような課題をかかえている。ふるさと教育をしても、18歳で地域から出ていく。教育会が動き、行政が地域をつなぐ事業をした。企業等の出前授業もした。学校の年間行事の中に地域の方が入る仕組みを作った。企業はエントリーして活動しやすくなった。未来への投資だと思っている。子どもたちはかかわることで自己肯定感をもち、育っていく。変容していくことを6年間ほど肌で感じた。愛媛に初めてきたが、すばらしい。人の活用をすればもっとすばらしいことができる。

若松：10年ほどこの会を開催してきたが、企業とのかかわりの例はない。どうするか今後が楽しみである。

会場D：地域、地域というが、なにを地域というのだろうか。

学生：将来先生になりたいと思っている。広島、ベッタタウンに住んでいる。荒れている。地域とのかかわりも悪い。橋渡しみたいな新谷さんの話、中学生にアプローチしているこつなど教えてほしい。

新谷：学校側から見れば、学校に入る地域の人はずべて地域の人。住んでいるすべての世代。どのような人がかかわるのか、かかわらないのか。高齢者に来ていただく。先生じゃない立場の方たちなので、生徒は聞きやすい。生徒の言葉を聞いてくれる人が学校にもいたらと思う。このような人間が学校に入るシステムが必要。

中村：小学校公民館区のすべての人のことを地域という。公民館に入ると、西予市全域。中学生へのアプローチは、小学校通学合宿に参加してもらおう。小学校の時のガキ大将がリーダー。「だれかをいじめると私がいじめてやる」みたいな感じで。不登校の中学生が保健室登校はしないが、公民館登校をするようになった。どれだけ、かかわりをもつことができるかがカギである。

遠藤：小学校区、近隣の中学校区が地域。住んでいる人が作っていく社会それが地域。世代を越えて学び、議論をする。子どもたちのことだけではなく、未来をまちづくり

を考えていく。そういった社会をどんどん作っていけばいい。地域につながるもの、
そこでしかない

大畑：ふるさと教育とキャリア教育を一体化したい。小学校区すべての人。かかわっている人 2 万人、まだ足りない。行動しなくても応援してくれる人がコミュニティとしてかかわることが地域。

若松：提案をしてほしい。

新谷：ボランティア部は、商品開発をして「富より団子」を作った。学校と地域をつなぐきっかけとなるものをつくる。目に見えて代表するものがあればいいのではないか。

中村：まちづくりに人が集まると言うこと。夜の会には出たくない。集められると苦になる。どうしたら人が集まるか、自分なら行きたいなと思う活動を広げる、または声掛けなど。

遠藤：語り合い、学び合い、実践し合う。未来の自分を考えていく、可能性を伸ばしていく。そのような場をたくさん作っていく。

大畑：仕事探しをさせすぎた。ライフキャリア教育をする。生き様を会話をつなげながら伝える。効率的なことではなく、ここを大切にすること。対話は人を育てる。そのようなフォーラムをしている。意図的に対話、人を増やすことがキーワード

若松：懇意にしているギノー味噌株式会社に行って、お土産の味噌汁のもとを買ってきたので、持って帰ってほしい。地域ってなんなの、心の中にあるものか、ここにきて、24 時間大洲を意識をしたことはない。

最後に、中江藤樹の「五行を正す」を紹介する。

貌…柔らかく和かな顔で人と接し

言…温かく思いやりのある言葉で話しかけ

視…優しい眼ざしでものごとを見つめ

聴…耳と心を傾けて人の話を聴く

思…慈愛を以て相手のことを思う

未来を担う子供たちにどのようなかわりができるか、考えていきたい。